

# 18 世紀イギリス美学における天才論：概説と文献一覧

浜 下 昌 宏

## Summary

### **The Main Concepts of Genius in Eighteenth-Century British Aesthetic Thought : An Outline Sketch**

Masahiro Hamashita

In this paper I treat main concepts of genius in Eighteenth-Century British aesthetic thought from Addison to Gerard, in which by genius is meant a man or an ability endowed with natural creative power.

Addison classifies genius into two kinds : natural one without the help of art and learning, and the other trained by art and learning. It is noteworthy that he doesn't mention which one is superior. But Dr. Johnson, contrasting natural genius with art and learning, declares genius to be superior to artistic rules. To him, genius means natural gifts not deviated by learning and customs. Though Addison and Johnson are thus different in their opinions concerning genius, yet they both agree in appreciating Shakespeare as a model of genius.

Rising high estimations of Shakespeare in the Eighteenth-Century have developed the argument of genius, which defends his merit of originality against criticisms of his lack of learning and rules. So the main trend of conception of genius shifts from the opposition of genius with learning to the emphasis on the originality of genius.

Young distinguishes imitation of nature from that of classical authors, and calls the first the original in a proper sense. He opposes genius and originality to imitation. On the contrary, Duff doesn't intend originality by genius alone, but specifies original genius which lies in the natural ability to discover novelties and the uncommon. According to Duff, genius consists of imagination, judgment and taste, the first of which is the most effective. On this point, Gerard shares the concept of genius with Duff. For he attributes genius mainly to the association of ideas by imagination. And he thinks invention to be the essential characteristic of genius. He admits invention in both art and science, and also admits that genius needs not only natural gifts but art and learning. Thus his concept of genius is, in a sense, a synthesis of the Eighteenth-Century theories of genius.

ホワイトヘッドは、『科学と近代世界』(*Science and the Modern World*, 1925) のなかで、17世紀を「天才の世紀」と呼んでいる。彼が、その論拠として列挙する一連の大思想家、大科学者、つまり、たとえば、ベーコン、ハーヴェイ、ケプラー、ガリレオ、デカルト、パスカル、ホイヘンス、ボイル、ニュートン、ロック、スピノザ、ライプニッツ、等々をみると、たしかに、17世紀の他に「天才の世紀」と呼ぶにふさわしい時代があったであろうかという思いを我々に抱かせる。また、古代ギリシャ人を、ブルックハルトのように、地上にあらわれた「もっとも天才的な民族」とする評価も、我々は納得しないわけではない。しかし、18世紀もまた、ある意味で「天才」の時代であった。すなわち、実際に天才の名に値する者が17世紀ほどに輩出したわけではないとしても、「天才」についての議論が盛んであった時代として。近代美学成立の時代として、「新奇さ」(novelty)、「独創性」(originality)等を称揚し、旧来の権威や規則に対するアンチ・テーゼを試みていたことを考えれば、18世紀が「天才」概念を、時代特有のトポスとして共有していたのは、当然の成り行きであったとみることができよう。本稿は、18世紀の天才論の、イギリスにおける諸相を主題とするものである。今後の継続すべき詳細な研究のための準備として、概説と文献一覧が本稿の役割である。

#### 〔18世紀イギリス美学における天才論：概説〕

序・語としての<genius>：その勝義としての「天才」

I・「天才」概念の規定：アディソン、ジョンソン

II・天才の範例としてのシェイクスピア

III・「独創性」としての天才：ヤング、ダフ、ジェラード

結・“天才論の時代”としての18世紀

#### 序——語としての<genius>：その勝義としての「天才」

「天才」は、自由や生命の有機体などと並んで、機械論的には説明困難な基本概念である。天才論は、むしろ近代美学に固有のトポスではない。たしかに、19世紀に入って開花するロマン派においては、「天才」という概念はきわめて馴染みのあるものとなったが、無論「天才」論はロマン派の専有物でもない。古代ギリシャの時代より、「天才」は、<mania>や<daimon>といった言葉で議論されてきた。西欧近代、とくに18世紀において、ロマン派以前の時期においても改めて天才論が興隆したのは、バウムガルテンが美的体験における、明晰(clara)と不分明(obscura)の認識論的規定を試みたように、従来の神秘的・非合理的説明から、概念的に合理的な説明を与えようとする傾向の一環であった、といえよう。ロマン派では再び古典的な神話的・非合理的説明も見られるようになるが、本稿が取り上げるのは、それ以前の、いわゆる新古典主義期の天才論の諸相である。

ところで、18世紀イギリス美学における天才論を周到に論ずるのは、たとえば関連する原典

の調査ひとつをとっても、ちょうど<taste>に関して、1931年に出版されたドレイパーによる、いまなお標準的価値を失っていない文献一覧(J.W. Draper, *Eighteenth Century English Aesthetics: A Bibliography*, Heidelberg, 1931)に対して、クレイン(R.S. Crane, *MP*, 29, 1931), ヘイヴンズ(R.D. Havens, *MLN*, 47, 1932), そしてテンプルマンがただちに補足したように(W.D. Templeman, *MP*, 30, 1933), 文献の数は当時の定期刊行物も含めて数限りなく、満足できるような調査はほとんど不可能に近い。そこで、我々の研究方法としては、まず主要な原典によって、当時の天才論の概要を整理することから始めたい。

そもそも、我々は、英語の<genius>の語法・概念についての、いわば“lexicology”をめざすのか、それとも、我々において予めいくばくかの了解がある「天才」概念についての近代イギリスにおける展開を、<genius>という語を手がかりにして知ろうとするのか。

当然ながら、18世紀イギリス美学史を研究するうえでは、前者、すなわち<genius>の概念史が問題である。しかも、その語がただちに「天才」とは訳しきれない場合もあることに注意する必要がある。「天才」を意味する西欧の近代語は、ラテン語の<genius>, ないし<ingenium>に由来するようであるが、英語では<ingenium>は「天才」よりも「機知」(wit)の意味に訳される(cf. C.S. Lewis, *Studies in Words*, 1967, p. 89 ff.)。

また、<genius>の語法を辿ろうとすると、たとえば、フランシス・ウェッブ(Francis Webb, 1735—1815)という著者による、1790年刊の“On Genius”という詩編があることを知る(*Poems on Wisdom, on the Deity, on Genius*)。そこでそのテキストを調べてみると、彼は、「geniusとは単に教えられる能力の可能性を意味するだけでなく、理性や真理の支配のもとで諸能力が正しく作用している、秩序だった精神状態」(p. 40)であると言い、さらに続けて、「何事も正しく為すには精神は正しい状態にあらねばならず、そこで古代人は幸せを意味するのに“eudaimon”, つまり、善き genius の持ち主と呼んだ」(p. 40)と書いている。ここで語られている<genius>は、明らかに<daimon>の意味である。この意味は、OED, <genius>の項目の1のcで説明されているものに当たる。言うまでもなく、それを「天才」と訳すのは誤解を招くであろう。

それでは、我々は、カッシーラーが『啓蒙主義の哲学』(*Die Philosophie der Aufklärung*, 1932)において示した解釈のように、積極的に「天才」論の美学を求めるべく、シャフツベリから始めるのが適切なのであろうか。実際、ディドロの『百科全書』(*Encyclopédie*)の項目“génie”においても、シャフツベリは、特にロックと対比され、天才的な独創性があると高く評価されている。彼の直観主義の美学は、創造的な天才をよく説明するであろうし、シャフツベリをロマン主義の先駆に位置付ける解釈もある(cf. J.G. Robertson, *Studies in the Genesis of Romantic Theory in the Eighteenth Century*, N.Y., 1912)。しかし、その系列での天才論研究は、我々としては別の課題とし、本稿では、カッシーラーのシャフツベリ解釈の場合のように、テキストそのものにおける<genius>の語法とは別に、積極的な解釈で天才概念を規定・抽出するのではなく、原典自体がすでに天才論を主題的に論じているものを取り上げることにしたい。シャフツベリのテキストには、無論<genius>という語も見ることができるが、「天才」に

ついて語っているのは、たとえば次のような一節であろう。すなわち、「ミューズの弟子たちは必ずや自分の情念を表現し、感じるがままに書く。＜・・・＞彼らは自然な神的狂気 (natural enthusiasm) の力に支配されて、その力が彼らを最高の表現へと導く」(*Characteristics*, II, 347) 云々。たしかに、この一節は「天才」を論じていると解せるが、しかし、<genius>という語は出てこない。

<genius>が「天才」を意味する議論には、18世紀初頭では、アディソンに代表されるものがあり、また、世紀の後半でも、たとえばジェラードの周辺の、「賢人クラブ」と称したいわゆる「アバディーン哲学協会」の例会においても、その議事録を読むと、次のようなテーマでも議論が繰り広げられていたことがわかる (cf. J. McCosh, *The Scottish Philosophy*, 1875, pp. 467-473)。すなわち、日付は不詳であるがファルカーの発表で「天才はどの能力の完全さのうちに存するか」とか、あるいは、1765年1月22日には、キャンベルによる「親の生き方が子供の天才や知的能力に影響するかどうか」とか、また、1765年3月26日には、トーマス・ゴードンが「近代人においては天才の退化が在りや否や」、そして1769年12月12日には、ジェラードによって「偉大な天才達が、かれら自身にとってきわめてめざましい時期に世に現れたり、またしばしば集中的に現れる理由について、説明が可能か否か」といったテーマが論じられており、ジェラードの『天才論』(*Essay on Genius*) が書かれる背景が推測できる。

とまれ、我々が取り上げようとする「天才」の概念をひとまず辞書のうちに求めるとするならば、ジョンソンの『英語辞典』(S. Johnson, *A Dictionary of the English Language*, 1755) の中の<genius>の2番目、「卓越せる能力を付与された人物」(A man endowed with superior faculties) が、無論十分満足できる定義ではないが、ほぼそれにあたるであろう。

では、<genius>の勝義として「天才」を認めるのであれば、果たしてそれはどのように規定されているのか。まずその点から検討することにしよう。アディソンとジョンソン博士のテキストを取り上げることにしたい。

## I・「天才」概念の規定：アディソン、ジョンソン

アディソンは、<スペクテイター>誌第160号 (Sept. 3, 1711) において「天才」について語っている。「天才であるという性格づけ以上に、作家にもっとも頻繁に与えられるものはない」(There is no character more frequently given to a writer, than that of being a genius.) と彼は言い、天才を次のように2種類に分ける。まず、第一種の天才とは、「天性の才能の力のみにより、技芸や学問の助けなしに (by the mere strength of natural parts, and without any assistance of art or learning)、同時代の人たちを喜ばすような、さらには後代の人たちの驚異となるような作品を作り出す」者のことである。そのような「偉大な自然の天才」(great natural geniuses) には、フランス人が<Bel Esprit>と呼ぶ洗練さ以上に美しい、「高貴で荒々しく途方もないなにか」(something nobly wild and extravagant) がある。<Bel Esprit>によって天才を発揮する場合は、会話や思索、さらには読書といった教養により洗練されるが、そうした技芸・諸学 (arts and sciences) によると、必然的に模倣 (imitation) に陥る、とア

ディソンは言う。「偉大な自然の天才」は芸術の規則に馴化されたり乱されることがない。彼がその例として挙げるのは、とくに東方の古代人たち、ホメロス、旧約聖書などと、そしてシェイクスピアである。このアディソンの考え方からも、イギリス 18 世紀の天才論をめぐるいくつかの要素、すなわち、自然と芸芸・学問・教養との対比、天才と芸術規則との対比、天才と模倣との対比、さらには、フランス的洗練に対するアンチ・テーゼ、そして、シェイクスピアへの注目等がうかがえる。

次にアディソンが立てる、第二種の天才とは、彼自ら第一種の天才に劣るものではなく単なる種類のうえでの違いであると明記しているが、それは、「規則によって自己形成し、自分の才能を芸術の正確さや拘束に従属させている」者のことである。具体例としては、プラトンやアリストテレス、ヴィリギリウスやキケロ、そして同国人では、ミルトンやフランシス・ベーコンである。要するに、伝統的な芸術・学問を身につけたうえで、才能を発揮している者、と解することができる。この種の天才にありがちな危険は、模倣のために本来の能力を拘束してしまったり、モデルに即して自己形成するあまり、独自の自然な才能を存分に発揮できなくなることである、とアディソンは言う。

以上のようなアディソンの天才論は、自然による天才と、伝統文化の訓練による天才とを、バランスよく並列させ、過剰な天才崇拜に陥ってはいない。また、彼は、<スペクテイター>誌を中心に、独自の想像力論、さらには、「新奇さ」(novelty)や「独創性」(originality)などにも多々言及しているのであるが、それらの概念と天才とを結びつけて論じていない点は注目しておいてよいであろう。

さて、天才は規則よりも優越することを明言して、積極的にシェイクスピアを評価するのはジョンソン博士である。とくに、『シェイクスピア作品集』の「序文」(Preface to *The Plays of William Shakespeare*, 1765)において、具体的に、時と場の一致の規則を問題にし、近代の劇が古典劇の諸規則から脱皮するための道を開いている。彼は、<ランブラー>誌 125 号 (May 28, 1751) では、「あらゆる新しい天才はなんらかの革新 (innovation) を生み出す。その革新は、創出され認められると、それまでの作家たちの慣行で定着していた諸規則を覆す」と述べ、さらに、同誌 156 号 (Sept. 14, 1751) では、「いかなる文学上の独裁者も制定する権威をもたなかったような規則を破ることを不必要に恐れて、美の達成を自ら妨げる」ことのないよう説いている。ジョンソンの論調には、時代を切り開いていく、「新しきもの」への意欲が感じとられ、伝統的・権威的因習や慣行にとらわれない姿勢がある。彼が、天才と革新とを関係づけているのは重要である。とはいえ、彼が求める「新しさ」は、単なる際物ということではなく、むしろ、学芸や慣習によって疎外されてしまった、本来的自然の尊重を意味している。このことは、同じ<ランブラー>誌 156 号の次のような一節からも理解できよう。すなわち、「作家の第一の務めとは、本来の自然 (Nature) を慣習 (custom) から区別すること、すなわち、正しいがゆえに確立されているものを、確立されているだけの理由で正しいとされているものから区別することである」と彼は言う。規則や慣例が、単に歴史的・社会的な恣意の産物であることを彼は直視している。

ジョンソンによれば、シェイクスピアの偉大さは、他の作家が個々のセリフで観客を喜ばせるのに対して、無教養な者の注意を引き付けるほどの、事件の展開の巧みさ、驚くべきもの (the marvellous) の力による (cf. 'Preface')。アディソンによる、形式的・古典的体裁を模倣した作品<カト>とシェイクスピアの<オテロ>とを比較して、ジョンソンはまた次のように言う。アディソンが詩人たちの言葉を話すのに対して、シェイクスピアは人々の言葉を話しており、また、<カト>にはたくさんの美点が認められるものの、人間の感情や行動について学ぶものはなにもなく、技巧や虚構を駆使して観客に高貴な感情を容易に喚起してくれるが、心にまで伝わるものはない。<カト>が判断力と教養の産物であるとすれば、<オテロ>は人間観察と天才の所産である、と。

ジョンソンがシェイクスピアに託して論じている「天才」とは、細工や技巧にはよらない、本来的自然の表現者という意味であり、そこでは、天才と規則、天才と因習、自然と技芸、自然と教養、といった対概念が働いていることが理解できる。ただし、彼は一方的に天才や自然を称揚したわけではない。無教養な天才をもちあげようとする風潮の高まりを批判して、彼は<ランブラー> 154号 (Sept. 7, 1751) において、その傾向を「精神の病」(mental disease) であると警告している。

さて、以上のような、アディソンとジョンソンの天才論の検討から、天才論をめぐるいくつかの論点が抽出できるが、両者に共通するのは、何よりも天才の実例としてのシェイクスピアということである。シェイクスピア評価が天才論を展開させたひとつの大きな契機であったことを、次に確認することにした。

## II・天才の範例としてのシェイクスピア

シェイクスピア評価という風潮は、天才論のひとつの背景、あるいは契機として列挙するだけでなく、その議論のうちに、天才論をめぐるさまざまな要素・論点が内在的に関連していることを我々は理解するであろう。それ故、18世紀におけるシェイクスピア批評を概観してみよう。

18世紀以前には、たとえば、ベン・ジョンソンがシェイクスピアの古典的教養の欠如に言及したり ('To the Memory of My Beloved, the Author Mr. William Shakespeare'), また、ミルトンが、「空想の子供」(Fancy's child) と批判したりもした ('L'Allegro')。そのような批判が評価に代わるには、19世紀初頭のハズリットやコールリッジの登場まで待つ必要はなかった。すなわち、18世紀に入ると、アディソンやポープ、ジョンソン博士等により、シェイクスピアの欠点を難じるのではなく、積極面を評価しようとする傾向が生まれてくる。粗野、規則の欠如、無教育、というような欠点に目を向けるより、彼を模倣することの難しさ、偉大な独創性を長所とみなすようになる。ポープによる表現、「シェイクスピアの詩は実際、天啓 (inspiration) であった」('The Preface of the Editor' to *The Works of Shakespeare*, 1725) とか、ジョンソン博士の「彼の芝居は地上の自然の真の状態を示す」(the real state of sublunary Nature) ('Preface') とかいった言葉には、すでにシェイクスピアの偉大な才能に対する畏敬の

気持ちがかめられている。そして、三一致の規則をシェイクスピアが破っていることについても、「シェイクスピアがこの規則を知っていたかどうか、意図してそれを排したのかどうか、あるいはたまたま知らずに逸脱してしまったのか、そのようなことははっきりさせるのは不可能であるし、また追求しても無駄である」と断じている。むしろ、「そうした規則の違反は、シェイクスピアという総合的な天才 (comprehensive genius) にふさわしい」とまでジョンソンは言い切る。

エドワード・ヤングは、1759年公開の『独創的創作に関する考察』(*Conjectures on Original Composition*)〔以下の引用は、J. Nichols ed., *Edward Young: The Complete Works, Poetry and Prose*, 1854, rep. Olms, 1968, vol. 2 による〕の中で、「近代人のなかで第一の重要性をもつ大家はシェイクスピアであった」(p. 557)といい、古代人のなかではピンダロスを挙げ、ピンダロスが自分の無学を誇っていたことを記している。さらに、シェイクスピアを模倣するのは不可能であるとする議論に対して、ヤングは、「作家は彼のように独創的であろうとすべきであり、彼の作品ではなく、彼の方法を模倣すべきであり、そして、彼のように、一切の規則と伝統を無視して、直接自然へと目を向けるべきだ」と強調する。ヤングが、シェイクスピアを「独創的」(original) という形容で呼んでいる点に注目してよいであろう。

また、ウィリアム・ダフも、『独創的天才に関する試論』(*Essay on Original Genius*, 1767)〔以下の引用は、J.L. Mahoney, ed., Gainesville, 1964, による〕の中で、古代の詩人たちと独創性の点で匹敵できる唯一の近代人はシェイクスピアである、と述べている (p. 287)。

ところで、ロマン派の理論家であるハズリットによれば、天才の徴は細部の表現力、つまり「局部にみられる、想像力と人物描写の真実」(local truth of imagination and character) のうちにある (*Characters of Shakespeare's Plays*, 1817)。そのようなシェイクスピア理解に対して、ジョンソン博士は「シェイクスピアの総合的天才」(the comprehensive genius of Shakespeare) と言い、「多くの者を長きにわたり楽しませるのは、まさに一般的自然の正しい表現である」と言う ('Preface')。ジョシュア・レノルズの言葉を借りるならば、「芸術の美や偉大さ全体は、一切の個々の形態、地方的な慣習、個別的な諸部分、あらゆる種類の細部を越えたところに到達できることとにある」(*Discourse*, III, 1770)。したがって、細かな規則からの逸脱も、天才には許容される。

天才を、細部・局部の意匠や仕上りの巧みさ、見事さに求めるか、あるいは、全体的な印象や圧倒される感動に求めるかは、重要な対照をなす。この対比を、端的に、天才における芸術 (art)・教養 (learning) と自然 (nature)、と整理してみよう。もし、後述するジェラードの言うように、天才とは創意 (invention) とするならば、その創意は、技芸の巧みさのうちに発揮されるものなのか、それとも、天才個人の個性、全体的な独創性のうちに認めるべきものなのか。

天才と学芸という対比でみるならば、17世紀のドライデンによる英詩の語法の改良は、「想像力は正確さへ、描写の崇高さは感情の繊細さへ、そして堂々たるイメージは奇想とエピソードへと道を譲る」(Th. Warton, *Observations on the Faerie Queene*, Vol. 2, p. 111) という方



向をめざしていた。つまり、シェイクスピア的想像力と独創的天才から、フランス的技艺と教養への方向 (cf. J. Bate, *From Classic to Romantic*, 1946, 邦訳, p. 80) へと向いていたのであるが、18世紀のシェイクスピア評価は、まさにこの逆の方向をめざしていたと言えるであろう。あるいはまた、アディソンによれば、彼の言う想像力が特に快を感じるのは、ドライデンの言う、‘the Fairie Way of Writing’ (空想をかきたてるような書き方) によるが (「スペクテーター」419号)、これは、換言すれば、自然の観察ではなく創意と空想に基づく書き方と言える (cf. J. Bate, 同上, 邦訳, p. 78)。ただし、ここで言う「創意」とは、独創の意ではなく、修辞学で言う「意思の決定」の意味に近いであろう。

さらにアディソンによれば、シェイクスピア自身の作品にも、より独自の想像力から生まれたものや (ex. Caliban), より歴史や伝統に基づく人物像 (ex. Hotspur, Julius Caesar) がある (「スペクテーター」279号)。後者については、無論ある程度の学識が必要であったであろう。とはいえ、ここで我々が特に問題にしている学識とは、当時の教養ある詩人たちの間では当然のものとされていた、諸規則・制作上の約束事の知識である。

このように、18世紀におけるシェイクスピア批評からも、改めて天才における自然と学識・技艺という問題視角が抽出できる。同時に、「独創性」の強調という視点が新たに登場してきたことにも注目しなければならない。そこで次に、とくにこの「独創性」という点から天才を論じたものとして、ヤング、ダフ、そしてジェラードの所論を検討してみたい。

### Ⅲ・「独創性」としての天才：ヤング、ダフ、ジェラード

〔ヤング〕

「天才」とは、前記『独創的創作に関する考察』によるヤングの定義では、「目的に対して普通必要とされている手段なしに偉大なことを成し遂げる力」(p. 556) のことである。天才は「魔術師」(magician) のように「見えざる手段」(by means invisible) を使う (p. 556)。このような語法には、ナムの言うように、非科学的・非合理的手段による創作の可能性が意味されている (cf. M. Nahm, *The Artist as Creator*, 1975, p. 385 f.)。それに対して、学問 (learning) には、そのような「高級の助け」がないために、労苦と共に得たものを誇りとし、規則を愛し、有名な模範例を大事にする (p. 556)。

ヤングは二種類の天才を区別し、小兒的 (infantine) と成人的 (adult) とに分ける (p. 558)。「成人的天才は、パラス・アテナがゼウスの頭から生じたように、成長しきって、成熟して、自然の手から生まれる」者で、シェイクスピアがその代表例とされる。一方、スウィフトに代表される「小兒的天才」には、保護と教育が必要であり、才能が台無しにならぬよう、教養・学問によって指導を受ける。しかし、その学問のために本筋から外れることもある。おそらく、後者の天才は、アディソンの分類での二番目の天才に近いと解することができるが、ヤングでは明らかに低く評価されている。つまり、彼は、天才と学問・教養とを明確に対比しており、しかも、天才のほうを上位に置いている。「学問に我々は感謝するが、天才に対しては敬う。学は喜びを与えてくれるが、天才は陶醉させてくれる。学は知識を与えるが、天才はひらめきを

与える」(p. 559), とヤングは言う。さらに、「多くの天才は、おそらく、読み書きができなかったことであろう」、そして、「学問の無視によって、天才は時として栄光を得る」、とも断じている。ヤングにとって、生得的なもののこそ重要である。「天才は天に由来し、学は人に由来する」からであり、「学は借り物の知識であるのに対して、天才は生得的な、まさしく自分独自の知識である」からである(p. 559)。このように、彼が強調するのは、「独創的」(original)ということである。

彼は、「シェイクスピアはいかなる水も自分のワインに混ぜることをせず、無気力な(vapid)模倣で自分の天才を落としめることもしなかった」(p. 573), と言い、天才と模倣との関係を考慮しているが、しかし、彼における基本的な対概念は、独創と模倣というものである。すなわち、天才と学問という対比は、別の言い方では独創と模倣の対比となっている。彼は植物の比喩を使い、「独創はもっとも美しい花であり、模倣は成長は早いが開花の具合は貧弱である」(p. 551), と言う。

ヤングによれば、模倣は二種類に分けられ、自然の模倣を独創と呼び、古典の模倣を限定して模倣と呼ぶ(p. 551)。独創的な作品は、「文学の世界を広げ、新たな領域を加える」ゆえに大きな貢献をなす。しかし、実情では、「我々は独創的なものとして生まれながら、どうしてコピーとして死んでいくようになっているのか」、そして、「なぜ独創的なものがかくも乏しいのか」(p. 553), という問いが立てられる。それは、「著名な模範例が人の心を奪い、偏見を作りあげ、怖じかせて」しまい、「我々の関心を奪いとるために、我々自身の内面への十分な精査(inspection)を妨げ、我々の判断力に偏見を植え付けて、そのために我々自身の分別・感覚を弱体化し、名声の輝きで我々を脅すので、我々自身の力が葬られてしまう」(p. 553)。そして、「独創的なものは天才からのみ生ずる」(p. 558 f.)。それは植物の性質のように、「天才という生き生きとした根から内発的に生まれる」(p. 552)。「成長するのであり、作られるものではない」独創的なものに対して、模倣は、独自のものではなく既にある材料から、機械的技術(Mechanics)・技芸・労働により、ある種作られたもの(manufacture)である(p. 552)。このように、内発的自然が独創性の根拠であり、それは模倣と対立されている。ただし、ヤングにおいて、模倣は完全に否定されるわけではないが、古代人の作品ではなく方法を模倣すべきであり、精神や趣味判断において模倣すべきことが説かれる。そして、「有名な古代人の模倣を少なくすればするほど、より彼らに似るのだ」とヤングは言う(p. 555)。

以上のように、ヤングの天才論は、たしかに、天才と学問的教養、独創と模倣についての積極的な議論がなされており、さらに、基調にはある種の天才崇拜の調子があり、独創性の称賛、模倣の蔑視、古典に倣った創作での古い諸規則への従属の蔑視、人類の進歩と可能性への素朴な信念といった点でも、ロマン派の響きを感じられる(cf. L.P. Smith, *Words and Idioms*, 1925, p. 102)。しかし、創造のプロセスに関する詳しい考察は見られない。天才における自然、つまり、天才の能力のあり方に目を向け、その基本に想像力の機能を重視し、創造のプロセスを解明しようと試みたのが、次に取り上げる、ダフとジェラードの天才論である。

〔ダフ〕

ウィリアム・ダフの天才論は、前記『独創的天才に関する試論』(*Essay on Original Genius*, 1767)において展開されているが、この書の表題からも推測できるように、彼は広義の天才のうち、独創性のある天才に目を向けており、ヤングのように天才とは独創性の別名のような立場はとっていない。

「独創的」の規定について、次のようにまず語られる。「天才に付与される独創的という語が意味するのは、精神が所有している、その能力が行使されるあらゆる事柄において、なにか新しい・平凡でないものを発見する、生得的・根本的な能力のことである」(p. 86)、またさらに、「天才との関わりで考えられた独創的という語が指示しているのは、天才の成果の種類ではなく段階であり、しかも最高度の段階を意味する」(p. 86)。天才や独創性について語りながら、しかし、ダフの論調は、対象として捉えた「天才」についての客観的な分析であり、天才礼讃のような思い入れはない。その点で、ジェラードの天才論と、主題の扱い方でも共通性があり、ある意味では、両者によって、初めて美学的な、つまり批評的評論を超えた天才論を我々が持つことができたといってもよいであろう。ダフのねらいは、彼自身によれば、天才の本質の解明、天才の構成要素の抽出、それらの要素がそれぞれに、創作・科学的探究・芸術的創意と改善において作用する仕方の解明にある。そして、彼は、天才の構成要素として、想像力、判断力、そして趣味を挙げる。判断力が制作において、芸術の規則に反する点を指摘する (p. 10)、と彼が言うとき、すでに、今まで我々の関心の方向としてきた、天才と規則 (の知識)、という対立の枠を出てしまうことになる。判断力の有無が、天才の高揚 (the flights of Genius) と狂人の夢想 (the reveries of a Lunatic) とを区別するともされるのである (p. 24)。判断力は、ダフの天才論のなかでは、想像力が集めた観念を、比較したり、一致不一致・関係・類似性を見たり、同質のものを指摘したり、不調和なものを見つけて排除したり、また、想像力が生み出した創造物や発見の真理性や効用を確定したりして、重要な役割を果たしている (p. 8-9)。

想像力の機能は、精神が自らの作用を反省したり、感覚を経て悟性にもたらされた観念や、記憶に貯えられた観念を集積し、結合したり分解したりし、その新たな観念連合を創出し、無限に多様に観念を組み合わせるという造形力により (by its plastic power of inventing new associations of ideas, and of combining them with infinite variety: p. 7)、独自の創造物を提示し、自然界に存在していなかった光景や事物を展示することにある (p. 6-7)。

想像力は、理性的能力が発揮される以前の幼少期によく発揮されることがあり、若き天才を思わせる者もいるが、判断力が十分機能していない年令では、過剰で規律化されていない想像力のために、構想 (design)・感情 (sentiment)・表現 (expression) において不適切さや欠陥が見られる、とダフは言う (p. 29-31)。つまり、天才とは、必要な能力のバランスに基づくものであり、想像力と判断力の対立といった視点もダフにはない。もっとも、種々の天才のある中で、彼はあえて「独創的な」天才について論じようとしている点は、改めて注意しておこう。

それぞれの分野・専門において、天才と呼べる者はいるが、ダフが「独創的天才」、または

「真の天才」と呼ぶのは、幅広い想像力 (compass of imagination), 深い識別力 (depth of discernment), また、豊饒で強力な想像力 (fertility and force of imagination) ——あるいは「活発で広汎であるばかりでなく豊かで造形的な想像力」(a copious and plastic, as well as a vivid and extensive Imagination: p. 47); 「創造的想像力」(creative Imagination: p. 48) ——の持ち主であり、その能力によって、構想を創出し (invent the design), 威厳・優美・エネルギーを表現できるからである (p. 75)。学識や技芸の向上によって天才は高められるとされるが、そのような、自然の生得性と学問・技芸とが対立しないような、広義の「天才」概念は、ダフの言う「独創的天才」の概念をいっそう際立たせる。「独創的天才」とは、要するに創意・発見を発揮できる天才のことである。そして、その創意・発見は、想像力による観念連合の作用によるとされるが、しかし、ダフによるその問題の深い追究はなされていない。その理由は、彼の議論の力点が、あくまでも「独創性」の観念を強調することにあっただからであろう。

ダフはその天才論の最後の章で、独創的な詩の天才が初期の文明化されていない社会で現れること、そして、文明化された社会で登場することが稀であることを論じている (p. 260-296)。この議論は、先に言及した、ヤングが当代において独創性が乏しくなってきた理由を考察した際の、独創と模倣との対比に基づく議論とはやや趣旨を異にしている興味深い。

ダフによれば、まず、そこで取り上げる独創的天才が詩の分野に限られるのは、それ以外の、画家、雄弁家、音楽家、建築家、哲学者等は、まったくの自己教育では大成できず、かならずそれまで蓄積された技芸・学問、さらには先達に負わねばならないからである。そして、ダフが挙げる、独創的な詩の天才がより初期の非文明化社会に現われるという理由は、まず第一に、時代が古いということ自体、すべてが新しく、あらゆる試みが最初のものとなるということ。第2の理由は、初期の時代は風習が単純で統一的であるということ。つまり、文明化による過度の洗練・複雑化・混乱から免れていることである。さらに第3の理由は、非文明化の生活における、余裕 (leisure) と静けさ (tranquillity) である。心の平安を乱されない状態、素朴な生活の無垢な喜びの中で自然の情景と人間の本性とが共鳴し合い、あらゆる光景が靈感を与えてくれることになる。そして第4の理由は、非文明化の時代では、諸規則や批評による拘束・知識の要求から免れていることである。

以上のようなダフの議論の基調には、独創性と自然への回帰とを関連づける思想がうかがえる。そして、当代の文明社会において独創的な詩の天才が稀なのは、まさに、逆の理由による、とダフは言う。

以上のように、ダフによって、創意・創造に力点が置かれる「独創的天才」の概念と、改めて想像力の作用に焦点が当てられた。次に取り上げるジェラードは、その想像力による創意のプロセスを、観念連合説を周到に援用することで解明しようとしている。

[ジェラード]

ジェラードの『天才論』(*Essay on Genius*, 1774) [以下の引用は、B. Fabian ed., München, 1966, による] は、ヤングやダフの天才論と比べてもきわめて体系的であり、明らかに18世紀

の天才論のなかでは際立っている。カントに影響を与えたとされるのもうなずけよう。その詳細な分析と解釈には別稿を用意しているので、ここでは彼の「天才」概念と「創意」(invention)の概念とを取り上げることにしたい。

ジェラードによれば、まず、天才は知的能力の一つであり、「科学における新たな発見や、独自の芸術作品を制作する、創意の能力」(p. 8)である。「創意以上に労苦の多い精神的活動はない」(p. 31)と彼は言い、「創意」が天才の決定的徴表とされる。それが欠如する仕事は、どんな努力、技倆、勤勉さが発揮されていても、隷属的な模倣か鈍重な勤勉でしかない。その作品が、規律や規則に欠け、粗っぽくあっても、「新規さ、困難さ、威厳」(p. 9)が有りと評価されれば、天才の所産と認められる。そのような評価も、要するに「創意」に帰着されるが、ジェラードは「創意」の内容を2種類に分け、それに相応して2種の天才を分けている。

まず第1の天才とは、利用できる模範・モデルを持たぬままに創作し、しかも完全に近い形で構想を作り上げるものである(p. 17)。ホメロスがこの天才の例として挙げられている。次の天才は、先人によるヒントによって創作したか、あるいは、先行者の作品や発見を改良した者である(p. 17)。仮に先行者の不完全な創意を、完全にまで改良した天才は、第1の天才と同等の評価が与えられる。

ジェラードによるこの議論は、「創意」とは単なる「新奇さ」ではないことを示している。また、創意は模倣の反対概念と言うこともできよう。それでは、なぜ彼がヤング、ダフのように「独創」(original)という表現をとらなかったのか。この点については、ファビアンが、当時多用されていた「独創」という言葉使いのあいまいさに言及している(p. xxx)。だからといって、そのことがジェラードに「創意」という語を選ばせた積極的理由を示しているわけではない。それは今後の探究課題としておこう。

シェイクスピアとミルトンとを比べて、前者をより卓越した天才とする論拠も、創意という点である(p. 13)。その創意を説明する際に、「豊かで限らない」、とか、「粗さ」、「過剰」といった形容が付されるが、たしかに、いささか厳密な規定のないそのような語法も、天才の創意・創作から受ける印象や美的体験の強さ、圧倒性の表現と解しておけばよいであろう。あるいはまた、「小綺麗さ」(nicety)や「正確さ」(correctness)と対にされている記述もあるので(p. 14)、従来の規則の遵守による形式のみ整った作品と、天才による、未だ評価・位置付けの参照枠のない作品とを対比しているとも考えられる。たしかに、天才の徴表の絶対的基準は創意・独創性であるが、ジェラードの語法を見ると、それ以外に、力強さ・生命力・閃き・直観的洞察力、等も示唆されている。

さて、創意に関与する知的能力はなにか(p. 27)。創意という、新しい美・新しい真理は、普通でない視界を得ることによって可能となるゆえ、まず、さまざまな配列で観念を集める知的作用が要求される。つまり、感覚のように実在の事物から一步も先へ運んでくれないような能力ではなく(p. 28)、また、記憶力のように、単に知覚印象の持続にしか貢献しないような能力でもなく(p. 28)、「現前する知覚からはるかに多くの視野をもたらしてくれる」(p. 30)想像力が、創意のための基本的能力である。しかし、天才において、唯一想像力が働くのではなく、

判断力もまた共働的に働くこともジェラードは強調する (p. 32 f.)。想像力が創意・発見をなし、さらに証拠・論拠の材料を配列・整序するのを受けて、判断力はその配列が正しい関係の知覚を可能にするかを吟味する。そのような判断力の作用が必要である理由は、空想のままに粗野で気紛れで過剰な思いつきは創意の名に値せず、未熟で矛盾した議論、また些末で卑俗な感情も創意とは言えないからである (p. 37)。

こうして、想像力は判断力による規制を受けるとされるのであるが、ここでの議論で「粗野」「過剰」といった語法が改めて注目される。それらは、先に「創意」が技倆・勤勉と対比して強調された際の、「粗野」や「過剰」を容認する語法とは異なり、ここでは、想像力の奔放な作用を規制する「判断力」の働きを強調するための表現であろう。「天才」を合理的に説明しようとする試みの苦心が窺われる。

ジェラードは、天才を構成する要素を、想像力にすべて還元するのではなく、複数挙げるという分析的・科学的態度を貫き、天才を狂信的に論ずることから免れている。天才を人間の能力の枠内で捉えようとするにより、天才を超人・神的人間などという特別な存在、特別な天賦能力の持ち主のように別格化せず、ある意味で技芸・教養・訓練により獲得可能であるという余地を与えている。その点においても、彼以前の天才論では顕著に見られた、天才における自然と技芸・学識との対比から視野を一步広げており、ジェラードの天才論は18世紀の天才論の中にあって総合的意義を有していると言えるであろう。

### 結・“天才論の時代”としての18世紀

なぜ18世紀は、「天才の時代」ではなく、「天才論の時代」であったのか。いわゆる啓蒙期は、たしかに一方で市民社会の発展と政治制度の民主化が進行し、新たな文化・道徳が求められ、聴衆・読者・批評家・ジャーナリズムが台頭し、教育・学問・習慣・文化等の社会的転換期であったが、他方で、そのような社会と文明の進歩は人々の精神に自然的自発性を後退ないし喪失させることにもなった。つまり、天才が後退していく時代でもあった。そのような時代であって、学知・教養に満ちたユニヴァーシティ・ウィッツとは対照的なシェイクスピア、都会的洗練とはかけ離れたロバート・バーンズ、大陸からの伝統的・権威的文明、とくにフランスの宮廷文化とは無縁の『オシアン』などが、改めて評価・称賛されたことは、精神における自然や土俗の再発見の企てであったと位置付けることはできないであろうか。

たしかに、すでに18世紀において、ロマン主義の先駆とみなすことができる傾向はあったが、しかし、主流は「新古典主義」であると我々は解する。そのような思潮を定立する以上は、当然ながらその統括的な規定が要求されるわけであるが、ここでは、端的な特徴を指摘するだけに止めておきたい。

ラヴジョイは、論文「理神論と古典主義の共存」(A.O. Lovejoy, "The Parallel of Deism and Classicism", *MP*, 29, 1932) において、古典主義の規定として、「神的狂気 (enthusiasm) と独創 (originality) への反感」を挙げている。古典主義には、規則、統一性、理性や判断力への重視が含意されているとしたら、それらは、規則からの逸脱ないしは無視、感情の重視、独創

の評価という、「天才」の特徴づけによく使われる要素と対立する。しかし、それらの特徴づけが十全に該当するのがロマン派の天才論とするならば、それへの過渡期として、我々が扱った天才論を新古典主義の天才論と位置付けることが可能であろう。

その新古典主義の天才論の典型をジェラードに求めたい。つまり、彼において、天才の働きの基礎を想像力に与えられ、しかも従来の、天才は規則・学識に左右されないという天才論の傾向にそのまま依拠するのではなく、判断力の作用も受けつつ想像力自身のうちに自己規制の働きを捉えようとしている点にこそ、新古典期の理論にふさわしいように思われる。

以上、我々が試みた、天才論の諸相の整理から、ある程度、天才概念の変容が跡付けられたように思われる。つまり、まず、天才論の高揚と共に、自然的天才と学識・教養との対比、また、自然な内発性・生得的な天賦の才能と、教育・勤勉・慣習により育まれた才能との対比の図式があった。それが、つづいて、シェイクスピア批評の展開が加味されて、天才の特性としての創意・独創性の強調が見られ、しかも、それを実現する主要な知的能力として、想像力の役割・作用が重視されるようになる。

我々がまず取り上げた「天才における自然と技芸」という対比は、改めて考えてみると、18世紀という時代にふさわしい問題のように思われる。すなわち、18世紀が、イギリスにおいては名誉革命を経て、さらには統一王国（合邦）が成立した後の、制度的にも社会的にも、新しい階層の台頭によって形成されつつあった市民社会において、新たな芸術・道徳的規範・思想的支柱が求められていた時代であったことを思い起す必要があるであろう。過去からの遺産・伝統・権威の継承の仕方、大陸、とくにフランス文化との関係を顧慮しながら、再度人間の原初的本性・自然を直視し、それに基づいて新たな思想・芸術の興隆を図ろうとするとき、自然と技芸、自然と教養、といった天才論をめぐる問題は、まさにこの時代に端的に問われていたことでもあった。そしてさらに、ヤングやダフが強調した「独創性」、また、ダフやジェラードが示したように、天才の特性としての創意・創造・新たな発見を求めたことも、過渡期の時代になかった要求であったといえよう。ダフが取り上げ、ジェラードが詳しく論じる想像力の問題も、人間の自然が有する知的能力の中に、新たな創意・創造の根拠を求める試みの現れであった。そのような意味で、天才論はきわめて18世紀的問題であったと見ることもでき、18世紀を「天才論の時代」と呼ぶのは、あながち誇張でもないように思われる。

#### [18世紀イギリス美学における天才論：関連文献一覧]

##### <原典>

Addison, J., *The Spectator*, No. 160 (Sept. 3, 1711); 592 (Sept. 10, 1714).

Beattie, J., *The Minstrel; or, The Progress of Genius*, 1771, 1774.

[Belsham, William], "Observations on Genius", in *Essays, Philosophical, Historical, and Literary* (London, 1789), 383-398.

Blair, Hugh, *Critical Dissertation on the Poems of Ossian*, 1763.

Burke, Edmund, *Philosophical Inquiry into the Origin of our Idea of the Sublime and Beautiful*, 1756.

Capell, Edward, *Reflections on Originality in Authors*, 1766.

Duff, William, *Essay on Original Genius, and Its Various Modes of Exertion in Philosophy and the Fine Arts*, 1767 (rep. ed. J. L. Mahoney, Gainesville, 1964).

"By the word original, when applied to genius, we mean that native and radical power which the mind possesses, of discovering something new and uncommon in every subject on which it employs its faculties. This power appears in various forms, and operates with various energy < . . . >

The word original, considered in connection with genius, indicates the degree, not the kind of this accomplishment, and < . . . > it always denotes its highest degree." (p. 86)

Farquhar, George, *Discourse upon Comedy, in Reference to the English Stage*, 1702.

Gerard, A., *Essay on Taste*, 1759 (rep. of 1780 ed., Gainesville, 1963).

idem., *Essay on Genius*, 1774, (rep. München, 1966).

"Genius is properly the faculty of invention; by means of which a man is qualified for making new discoveries in science, or for producing original works of art." (p. 8)

Hurd, Richard, *Discourse concerning Poetical Imitation*, 1751, (in Hurd's edition of Horace's *Epistolae ad Pisones et Augustum*, vol. 2).

idem., *Letters on Chivalry and Romance*, 1762.

Johnson, S., *The Rambler*, No. 125 (May 28, 1751); 156 (Sep. 14, 1751).

idem., Preface to *The Plays of William Shakespeare*, 1765.

Montagu, Mrs. Elizabeth, *Essay on the Writings and Genius of Shakespeare*, 1769.

Moir, Rev. J., *Gleanings*, 1785.

Pope, A., Preface of the Editor to *The Works of Shakespeare*, 1725.

Reynolds, Sir Joshua, *Fifteen Discourses Delivered in the Royal Academy* (1769-90), 1797.

Shaftesbury, Third Earl of, *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*, 1711, 1714.

Sharpe, William, *Dissertation on Genius*, 1755. [*A Dissertation upon Genius: Or an Attempt to shew, That the Instances of Distinction, and Degrees of Superiority in the human Genius are not, fundamentally, the Result of Nature, but the Effect of Acquisition*]

Warton, Joseph, *Essay on the Genius and Writings of Pope*, 1757.

Warton, Thomas, *Observations on the Faerie Queene*, 1754.

Wood, Robert, *Essay on the Original Genius of Homer*, 1769.

Young, Edward, *Conjectures on Original Composition in a Letter to the Author of "Sir Charles Grandison"*, 1759 (in J. Nichols ed., *Edward Young: The Complete Works, Poetry and Prose*, 1854, rep. Olms, 1968, vol. 2).

"An original may be said to be of a vegetable nature; it rises spontaneously from the vital root of Genius; it grows, it is not made." (p. 552)

#### < 研究書・論文 >

Abrams, M.H., "Archetypal Analogies in the Language of Criticism", *University of Toronto Quarterly*, 18 (1948-49), 313-327.

idem., *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition*, New York, 1953.

水之江有一訳『鏡とランプ』(研究社, 1976)

Babbitt, Irving, *Rousseau and Romanticism*, 1919 (Univ. of Texas Press, 1977).

Babcock, R.W., "The Idea of Taste in the Eighteenth Century", *PMLA*, 50 (1935), 922-926.

Bate, Walter Jackson, "The Sympathetic Imagination in the Eighteenth-Century English Criticism", *ELH*, 12 (1945), 144-164.

idem., *From Classic to Romantic: Premises of Taste in Eighteenth-Century England*, Cambridge, Mass., 1946. 青山富士夫訳『古典主義からロマン主義へ』(北星堂書店, S. 61)



- Bäumler, A., *Kants Kritik der Urtheilskraft, ihre Geschichte und Systematik*, Halle, 1923.
- Bitzer, Lloyd F., "Editor's Introduction", George Cambell, *The Philosophy of Rhetoric* . . . , Landmarks in Rhetoric and Public Address (Carbondale, Ill., 1963), ix–liii.
- Bond, D.F., "The Neo-Classical Psychology of the Imagination", *ELH*, 4 (1937), 245–64.
- Bosker, A., *Literary Criticism in the Age of Johnson*. Groningen, 1953.
- Bray, J.W., *A History of English Critical Terms*, D.C. Heath, 1898.
- Brown, P. Hume, "Intellectual Influences of Scotland on the Continent", *Scottish Historical Review*, 11 (1913–1914), 121–135.
- Bundy, Murry Wright, *The Theory of Imagination in Classical and Mediaeval Thought*, Univ. of Illinois Press, Urbana, 1927.
- idem., "'Invention' and 'Imagination' in the Renaissance", *JEGP*, 29 (1930).
- Cassirer, Ernst, *Die Philosophie der Aufklärung*, Tübingen, 1932. *The Philosophy of the Enlightenment*, translated by F.C.A. Koelle and J.P. Pettegrove, Princeton U.P., 1951 (Beacon Paperback edition, 1955). 中野好之訳『啓蒙主義の哲学』(紀伊国屋書店, 1962)
- Cauvel, Martha Jane, *The Critic, "Blest with a Poet's Fire": Alexander Gerard's Interpretation of Genius, Taste, and Aesthetic Criticism* (unpubl. diss. Bryn Mawr College, 1962); Dissertation Abstracts, 23 (1963), 4382.
- Cohen, Ralph, "Association of Ideas and Poetic Unity", *Philological Quarterly*, 36 (1957), 465–474.
- idem., (ed.), *Studies in Eighteenth-Century British Art and Aesthetics*, Univ. of California Press, 1985.
- Crane, R.S., "English Neoclassical Criticism: An Outline Sketch", in *Critics and Criticism, Ancient and Modern*, Univ. of Chicago Press, 1952.
- idem., "On Writing the History of English Criticism, 1650–1800", *Univ. of Toronto Quarterly*, 22 (July, 1953), 376–391.
- Currie, R., *Genius, an Ideology in Literature*, London, 1974.
- Dieckmann, H., "Diderot's Conception of Genius", *JHI*, 2 (1941), 151–182.
- Dictionary of the History of Ideas*, Charles Scribner's Sons, 1968, 1973 [related articles by Tonnelli, R. Wittokower, et al.] 細井雄介ほか訳『天才とは何か』(平凡社, 1987)
- Dobai, J., *Die Kunstliteratur des Klassizismus und des Romantik in England*, 4 Bde, Benteli, 1974–77, esp. Bd. II.
- Elledge, Scott, (ed.), *Eighteenth-Century Critical Essays*, 2 vols, Ithaca, N.Y. 1961.
- Engell, James, *The Creative Imagination, Enlightenment to Romanticism*, Harvard U.P., 1981.
- Ernst, J., *Der Geniebegriff der Stürmer und Dränger und der Frühromantiker*, Diss., Zürich, 1916.
- Fabian, B., "Introduction" to the critical edition of Alexander Gerard, *Essay on Genius*, 1774 (München, 1966).
- idem., "Der Naturwissenschaftler als Originalgenie", in *Europäische Aufklärung. Herbert Dieckmann zum 60. Geburtstag*, eds H. Friedrich and F. Schalk (Munich, 1967), 47–68.
- Forbes, William, *Account of the Life and Writings of James Beattie*, Edinburgh, 1806.
- Folkierski, W., *Entre le Classicisme et le Romantisme*, Paris, 1925.
- Gallaway, F., *Reason, Rule and Revolt in English Classicism*, Univ. of Kentucky Press, 1966.
- Goldberg, M.A., "Wit and the Imagination in the Eighteenth-Century Aesthetics", *JAAC*, 16 (1957–1958), 503–509.
- Grappin, P., *La Théorie du Génie dans le Préclassicism Allemand*, Paris, 1952.
- Grene, Marjorie, "Gerard's *Essay on Taste*", *MP*, 41 (1943–1944), 45–58.
- Hettner, Hermann, *Literaturgeschichte des achtzehnten Jahrhunderts*: I. Geschichte der englischen Literatur von der Wiederherstellung des Königthums bis in die zweite Hälfte des achtzehnten Jahrhunderts, 1660–1770, Braunschweig, 1856.

- Hipple, W.J., Jr., *The Beautiful, The Sublime, and The Picturesque in Eighteenth-Century British Aesthetic Theory*, Carbondale, Ill., 1957.
- idem., "Introduction" to the edition of Alexander Gerard, *Essay on Taste*. . . : A Facsimile Reproduction of the Third Edition (1780), Gainesville, Florida, 1963, v-xxviii.
- Hooker, Edward Niles, "The Discussion of Taste, from 1750 to 1770, and the New Trends in Literary Criticism", *PMLA*, 49 (1934), 577-592.
- Jones, H. M., "The Doctrine of Romantic Genius", in *Revolution and Romanticism*, Cambridge, Mass., 1974, 261-95.
- Kallich, Martin, "The Argument against the Association of Ideas in Eighteenth-Century Aesthetics", *MLQ*, 15 (1954), 125-136.
- idem., "The Associationist Criticism of Francis Hutcheson and David Hume", *Studies in Philology*, 43 (1946), 644-667.
- idem., *The Association of Ideas and Critical Theory in 18th-Century England*, The Hague: Mouton, 1970.
- Kaufmann, Paul, "Heralds of Original Genius", in *Essays in Memory of Barrett Wendell, by his Assistants*, Cambridge, Mass., 1926, 191-217.
- Kivy, P., *The Seventh Sense*, N. Y., 1976.
- Lewis, C.S., *Studies in Words*, 2nd ed., Cambridge, 1967.
- Lowinsky, E.E., "Musical Genius", in *Dictionary of the History of Ideas*, ed. P.P. Wiener (New York, 1968; 1973), vol. 2, 312-26.
- McCosh, James, *The Scottish Philosophy, Biographical, Expository, Critical, from Hutcheson to Hamilton*, London, 1875.
- McFarland, Thomas, *Originality and Imagination*, Baltimore, 1985.
- McKenzie, Gordon, *Critical Responsiveness: A Study of the Psychological Current in later Eighteenth-Century Criticism*, Univ. of California Publications in English, vol. 20, Berkeley and Los Angeles, 1949.
- Mahoney, John L., "Introduction" to the edition of William Duff, *Essay on Original Genius*. . . : A Facsimile Reproduction. . . , Gainesville, Florida, 1964, v-ix.
- Mann, Elizabeth L., "The Problem of Originality in English Literary Criticism, 1750-1800", *PQ*, 18 (1939), 97-118.
- Monk, Samuel H., *The Sublime: A Study of Critical Theories in XVIII-Century England*, New York, 1935.
- Murray, Penelope, *Genius: the History of an Idea*, Blackwell, 1989.
- Nahm, Milton C., *The Artist as Creator: An Essay of Human Freedom*, Baltimore, 1956.
- idem., "The Relation of Aesthetics and Criticism", *The Personalist*, 45 (1964), 362-384.
- idem. ed., *Readings in Philosophy of Art and Aesthetics*, Prentice-Hall, 1975.
- Ong, Walter J., "Psyche and the Geometers: Aspects of Associationist Critical Theory", *MP*, 49 (1951-1952), 16-27.
- Poirier, R., "The Question of Genius", *Raritan*, 5, 4 (Spring, 1986), 77-104.
- Porter, R., "Madness and Genius", in *Social History of Madness* (London, 1987), 60-81.
- Price, Mary Bell & Lawrence M., *The Publication of English Humaniora in Germany in the Eighteenth Century*, Univ. of California Publications in Modern Philology, vol. 44, Berkeley and Los Angeles, 1955.
- Ritter, J., hrg., *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, art. "Genie", Schwabe, 1974.
- Robertson, J. G., *Studies in the Genesis of Romantic Theory in the Eighteenth Century*, N. Y., 1912.
- Rosenthal, E., *Der Geniebegriff des Aufklärungszeitalters: Lessing und die Popularphilosophie*, Berlin,

- 1933.
- Schlapp, Otto, *Kants Lehre vom Genie und die Entstehung der 'Kritik der Urteilskraft'*, Göttingen, 1901.
- Schmidt, J., *Die Geschichte des Genie-Gedankens in der deutschen Literatur, Philosophie und Politik 1750-1945*, 2 vols, Darmstadt, 1985.
- Simonsuuri, K., *Homer's Original Genius: Eighteenth-century Notions of the Early Greek Epic* (1688-1798), Cambridge, 1979.
- Smith, D. Nichol, ed., *Eighteenth-Century Essays on Shakespeare*, 2nd ed., Oxford, 1963.
- Smith, Logan Pearsall, *Words and Idioms: Studies in the English Language*, London, 1925. [esp. "Four Romantic Words", 66-134]
- Sudheimer, H., *Der Geniebegriff des jungen Goethe*, Berlin, 1935.
- Thüme, Hans, *Beiträge zur Geschichte des Geniebegriffs in England*, Studien zur Englischen Philologie, Heft 71, Halle, 1927.
- Tonnelli, G., "Genius: from the Renaissance to 1770", *Dictionary of the History of Idea*, ed. P.P. Wiener (New York, 1968; 1973), vol. 2, 293-7.
- idem., "Kant's Early Theory of Genius(1770-1779): Part II", *Journal of the History of Philosophy*, 4 (1966).
- Wasserman, E. R., "The Artist", in J. L. Clifford ed., *Man Versus Society in Eighteenth Century Britain*, Cambridge, 1968.
- Wellek, René, *History of Modern Criticism, 1750-1950: I. The Later Eighteenth Century*, New Haven, 1955.
- Wiley, Margaret Lee, "Genius: A Problem in Definition", *Univ. of Texas Studies in English*, 16 (1936), 77-83.
- idem., "Gerard and the Scots Societies", *Univ. of Texas Studies in English*, 20 (1940), 132-136.
- idem., "A Supplement to the Bibliography of 'Shakespeare Idolatry'", *Studies in Bibliography*, 4 (1951-1952), 164-166.
- Wimsatt, William K., Jr., & Cleanth Brooks, *Literary Criticism: A Short History*, New York, 1957.
- Wittkower, R., "Genius: Individualism in Art and Artist", *Dictionary of the History of Ideas*, ed. P.P. Wiener (New York, 1968; 1973), vol. 2, 297-312.
- idem., "Imitation, Eclecticism, and Genius", in E. R. Wasserman ed., *Aspects of the Eighteenth Century*, Baltimore, 1965.
- Wolf, Hermann, *Versuch einer Geschichte des Geniebegriffs in der deutschen Ästhetik des 18. Jahrhunderts*, Beiträge zur Philosophie, 9, Heidelberg, 1923. [I: von Gottsched bis auf Lessing]
- Woodhouse, A.S.P., "Romanticism and the History of Ideas", *English Studies Today: Paper Read at the International Conference of University Professors of English Held in Magdalene College, Oxford, August 1950*, ed. C.L. Wrenn & G. Bullough, London, 1951, 120-140.
- Zilsel, E., *Die Entstehung des Geniebegriffes. Ein Beitrag zur Ideengeschichte der Antike und des Frühkapitalismus*, Tübingen, 1926.

[本研究は平成1年度2年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。]

(原稿受理 1990 年 12 月 7 日)